

---

[成果情報名] モモ若木の枯死症の発生防止対策

[要約] モモ若木の枯死症は、基肥施肥量が多い場合に発生が多い。「おはつもも」台では基肥を過剰に施用しない、または「ひだ国府紅しだれ」台を用いることにより枯死症の発生を軽減できる。

[キーワード] モモ、若木、枯死症、基肥施肥量、ひだ国府紅しだれ

[担当部署] 豊前分場；果樹チーム

[連絡先] 0930-23-0163

[対象項目] 果樹

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

---

[背景・ねらい]

近年、県内のモモ産地では主に3～5年生の若木の主幹部に胴枯様の障害などが発生し、枯死する枯死症が問題となっている。この枯死症はほ場によっては2～3割程度発生し、農家所得に影響を与えている。クリでは秋季の施肥量が多いと枯死症が発生しやすいことが報告されている。しかし、モモの枯死症については施肥量や台木の違いによる影響は明らかでない。

そこで、モモ若木の枯死症に及ぼす基肥の施肥量と台木の違いによる影響を明らかにし、枯死症の発生を低減する方法を確立する。

(要望機関名：京築普、JA筑前あさくら、JAふくおか八女（H28、29、R1）)

[成果の内容・特徴]

1. 「おはつもも」台では基肥を慣行施肥量の倍量とすると、枯死症の発生割合が多くなり、障害程度も重くなる（図1）。
2. 基肥を慣行の3倍量施用すると、慣行に比べ主幹等に発生する重大な症状である胴枯様障害の発生箇所が増加する（表1）。
3. 「ひだ国府紅しだれ」台を用いると、「おはつもも」台に比べ、多肥条件下でも枯死症の発生割合が少なく、障害程度も軽くなる（図1）。

[成果の活用面・留意点]

1. モモ若木の枯死症の発生を低減するための手段として活用できる。
2. 若木の基肥の施用量は窒素（N）、リン酸（ $P_2O_5$ ）、カリ（ $K_2O$ ）とも成分量で10kg/10a程度とする。
3. 「ひだ国府紅しだれ」台は「おはつもも」台と比較して、穂木品種の初期樹冠拡大が遅れることがある。

[具体的データ]

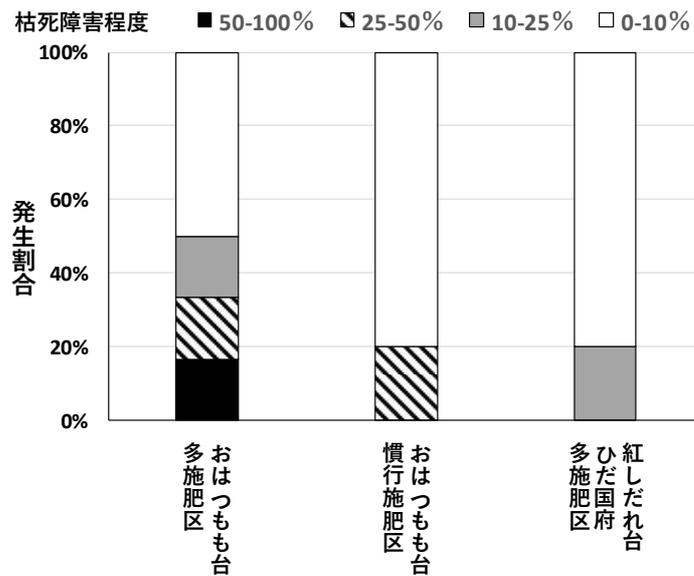


図1 基肥施肥量と台木品種が3年生モモの枯死症発生に及ぼす影響（平成31年～令和2年）

- 注) 1. 枯死障害程度は株全体のうち枯死部分の割合を示す。  
 2. 基肥は10月23日に施用  
 3. 慣行の施肥量はN : P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> : K<sub>2</sub>O = 10.5 : 12.0 : 10.5kg/10a  
 4. 多施肥区は慣行施肥量の2倍量を施用  
 5. 各区6～10樹（日川白鳳3年生）を供試

表1 基肥施肥量が3年生モモの枯死障害発生に及ぼす影響（令和2年～令和3年）

基肥処理	樹高 (cm)	胴枯様障害数		枯死先端芽数 (個)	枯死芽率 (%)
		全体 (箇所)	重度 (箇所)		
無施肥	156.0 a	0.6 a	0.0 a	12.8	23.4
慣行	178.0 b	0.4 a	0.2 ab	13.6	21.9
2倍量	167.6 ab	0.6 a	0.6 ab	17.6	28.4
3倍量	170.0 ab	2.2 b	1.0 b	15.8	27.6

- 注) 1. Tukey-Kramer検定により同項目の異文字間は5%水準で有意差あり。  
 2. 胴枯様障害数（重度）は胴枯様障害のうち樹液が発生した数を示す。  
 3. 枯死芽率 = (枯死先端芽数 / 先端芽数) × 100 (%)  
 4. 各区5樹（日川白鳳3年生/おはつもも台）を供試

[その他]

研究課題名：モモの品種・系統適応性

予算区分：経常

研究期間：令和2年度（昭和54～継続）

研究担当者：池上秀利、野方仁、姫野修一